

364) 君に捧げる歌

陽だまりに腰をおろして 秋風をたどってゆけば
コスモスの揺れる窓辺に よみがえる夏の思い出
Tシャツを肩までまくり スケボーに夢中になって
夜明けから日が暮れるまで 太陽の下で過ごした
平凡な夏だったけど 君がいて幸せだった

夕立の雨にうたれて 透き通るシャツの下には
花がらの君の水着が いつになく^{なまめ}艶かしくて
浜辺まで走っていった そんな日も今は思い出
あのころの君の姿を アルバムに探してみたい
平凡な夏を過ごして 僕たちは大人になった

^{ゆかた}浴衣着て花火の夜は 何もかも美しすぎて
^{いのち}瞬間に生命を賭けて 瞬間に燃え尽きてゆく
赤い火が^{きら}煌めくように 僕たちは口づけしてた
帰らない過ぎしページを 思い出と人は言うけど
平凡な夏だったから いつまでも心に生きてる

秋風に去ってゆくもの 秋風とともに来るもの
交差する季節をこえて 足早に季節は流れた
僕たちは現実という 人生を一緒に生きて
いつの日も確かな愛で しっかりと結ばれている
平凡な人生だけど 君がいて幸せだった